

慶應義塾に関連した出版物や教職員の新刊著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

圧倒的な「自然」を前に、
人間は何を考えてきたのか？

『自然を前にした人間の哲学』

―古代から近代にかけての12の問いかけ―

神崎忠昭（文学部教授）、野元晋（言語文化研究所教授）編

慶應義塾大学出版会／3500円（2020年2月）



私たちの遠い祖先は周囲に「自ずと」存在するもの「自然」を知ること、知性を育み、それを受け継ぐことで「人間」となった。やがて人間は天体を含めた「自然」を「観察し、愛し、讃え、畏怖」することを通して、支配することを考える……。本書は、言語文化研究所の公募研究に集まった時代や地域を超えた12人の研究者たちの議論と論考の成果である。古代ギリシャにおける「哲学の創始者」タレスから、近代自然科学に批判的な眼差しを向けた文学者ゲーテや自然な「美」を理想とする20世紀の柳宗悦まで、「人間」と「自然」を本質的に理解する手がかりとなる問いかけがここにある。

教職員執筆の新刊

●細谷雄一（法学部教授）ほか編著

『新しい地政学』東洋経済新報社／2400円（2020年2月）

●諏訪正樹（環境情報学部教授）編著

『「間合い」とは何か―二人称の身体論』

春秋社／2200円（2020年2月）

●駒村康平（経済学部教授）編著

『社会のしんがり』新泉社／2800円（2020年3月）

●片山杜秀（法学部教授）著

『皇国史観』文春新書／820円（2020年4月）

●土居文明（経済学部教授）著

『平成の経済政策はどう決められたか―アベノミクスの源流をさぐる』

中央公論新社／1800円（2020年5月）

●渡辺靖（環境情報学部教授）著

『白人ナショナリズム―アメリカを揺るがす「文化的反動」』

中公新書／800円（2020年5月）

慶應義塾この一冊

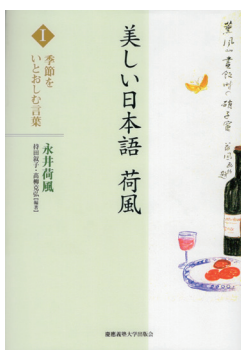
『美しい日本語 荷風 I・II・III』

永井荷風 著

持田叙子、高柳克弘 編著

慶應義塾大学出版会／

各巻2700円（2019年8月）



永井荷風は文学科教授を務め、『三田文学』を創刊した慶應義塾と縁の深い文学者。本書は荷風生誕140年、没後60年を記念して編まれた全3巻のアンソロジーである。荷風研究の第一人者でもある作家・持田叙子氏と気鋭の俳人・高柳克弘氏が、荷風が遺した詩・散文（小説、随筆など）・俳句から選りすぐりの「美しい日本語」を紹介し、各作品には詳細かつ作品への愛情あふれる注釈・解説を付した。荷風ファンがその魅力を再発見できるだけでなく、荷風文学への格好の入門書にもなっている。